

次の文章を読んで問いに答えよ。

「私もね、実習に行ったのよ、保育園に」

ちよつと唐突にも聞こえたけれど、黙ってうなずいた。

「もうそんな時期なんだ。で、どうだったの」

「うーん、それがねえ」

ひかりは力なく微笑ほほえんだ。

「私も早希とまったくおんなじこと考えてたよ」  
その笑顔を思わず見つめてしまう。何をいつてるんだろう。まったくおんなじこと？ ひかりが？

「朝、保育園の玄関で赤ちゃんや子供たちを預かるでしょう。そのときに、どうしても意識しちゃうのよ。その子たちのおかあさんのことを。おかあさんがどんな仕事をしているかを」

よくわからなかった。しっかりしていても明るかったひかりが、こんな疲れたような顔で何をいおうとしているのか。

「私は赤ちゃんも子供たちも大好き。保育士になつたら私がしっかり見てるから、おかあさんたちもがんばってきてください、って笑顔で送り出すつもりだったの」

「うん」

「それなのにね。相手も、こつちをあんまり信用してないんじゃないかって。子供を持ったこともな

い若い保育士に何がわかるって思われてる気がして」

「それは」

言葉を無理に挟み込んだ。相手も、といったのだから。きつとこの後に、私も、と続く。どこかで止めてあげないと、ひかりがひかりらしくない方向へ屈折してしまいそうだった。

「それは考えすぎだった。保育士だって最初はみんな新人なんだから、おかあさんたちだってそれくらいわかってるよ。ひかりは優秀だからだいじょうぶ」

「ううん」

ひかりはうつむき加減の顔を横に振った。

「自分でいうのもなんだけどーあ、やだ、私も前置きしてるー小さい頃から優秀だっていわれてきて、でもそこが私のいちばんの弱点だったんだよね」

<sup>(1)</sup> 淡々と口にするのを聞いて、私は観念した。ひかりも話したがっている。どんなにひかりらしくなくても、それを聞くのが私の役目だろう。

「自分の子供を産んでないどころか、結婚もしてなくて、赤ちゃん預かりますっていったって信用されなくて当たり前前なんだよね。だから、私が信用されないのはしかたないと思うの。でもね、問題なのは私もおかあさんを信用してないところ。きちん

働いてるおかあさんの赤ちゃんを預かるのはいいけど、私よりも働きのよくないような人がだらだら働くために子供を預かるなんて本末転倒<sup>(2)</sup>じゃないか、って心のどこかで思っちゃうんだ。もちろん頭ではそれがおかしいってことはよくわかってるの。だって預かるのが私の仕事なんだから。実際はもちろんどの赤ちゃんもどの子供も平等だよ。どの子もかわいい。それはほんとう。だけど、<sup>(ア)</sup>なんだかもやややる気持ちは、どうしても残るんだ」

それが、優秀だといわれ続けてきたことの弊害なのか。私はひかりのように優秀ではないけれど、もしかすると似ているのかもしれない。どうして自分が、と思っている。仕事であろうと、がんばらない人をサポートすることに違和感を持っている。

がんばれ、といわれて育った。ぎりぎりまでがんばれ。

努力もしないうちから自分には何もできないと  
思っている人のことをなまぬるいと思ってしまう。  
何もできなくてもそれでいいとっていて、いざと  
いうときには誰かが助けってくれると思っていて。そ  
の白砂糖みたいな甘さに身震いが出る。そういう人  
たちの引っかかりのなさが不気味だった。かつこい  
いとか、きれいだとか、できるとか、速いとか、う  
まいとか、いろんなほめ言葉を口にするときに、ど

こにも引つかからないらしい。その称賛を受ける人は、それだけのことを積み重ねてきている。悔しいとは思わないのだろうか。自分にはできなかつたことを、誰かはやってのけた。その結果だけを簡単にほめることができるのは、素直だからなのだろうか。屈託のないほめ言葉を聞くと、<sup>(1)</sup>無神経な手で首筋を撫<sup>な</sup>でられるような心地がした。

この手に負えない自尊心はどこから来るのだろうか。自分も駄目なくせに、がんばれない人を見下す。自分の駄目さを受け入れられず、自分の中にあるかもしれないわずかな可能性をなんとか引き出そうとして、往生際悪くじたばたして、そこでまた軋轢<sup>あつれき</sup>を生んで。冷たいとか傲慢だとか陰口をいわれても、否定はしない。しかたのないことだ。きつとほんとうにそうなんだろうと思うから。

でも、目の前のひかりは違うと思っていた。だって、ひかりはいつもやさしい。頭がよくて、気配りができて、誰からも信頼される人だった。

少し、気まづかった。でも、気まづさの底にびりびりと流れるものがある。ひかりでも同じような気持ちになることがあるんだ。それもこんな、自意識を持って余したようなみつともない気持ちに。それを話してくれたことがうれしかった。人前で愚痴をこぼすところなど見たこともなかったのだ。どうすれ

ばいいかはわからないけど、格闘し続けようと思う。もう少しこの気持ちと格闘していよう。

だけど、私の口から出たのはどうしようもなく凡庸な、毒にも薬にもならない台詞せりふだった。

「いろいろあるよね」

ばかだと思う。もっと気の利いたことを、せめてもっと誠実な言葉をいいたかった。ひかりはあきらめたのか、それとも最初から期待していなかったのか、小さく笑ってうなずいた。

「うん。いろいろあるね」

それから、いつもの明るい声に戻って、

「さ、そろそろ行こうか」

これから、この近くの劇場で小さな劇団のミュージカル公演があるのだ。そこに、同級生だった原千夏が出演している。これまでも何度か案内をもらって観みにきているけれど、アンサンブルというのだったか、たいがい舞台の後ろで踊っている一団の中にいた。でも、今回ははがきに「ひとりで歌わせてもらってます」と千夏の字で走り書きされていた。

案内をもらわなければ、劇団の公演など縁がなかった。何度か観た今だって、ほんとうのところ、ミュージカルには抵抗があるのだ。役者たちのお芝居も大げさ気味だし、台詞の続きで突然歌い出されたりすると観ているこちらが気恥ずかしい。

「千夏の歌、楽しみだね」

込んだ狭い入り口でチケットを切ってもらいながらひかりが振り向いた。すっかりいつもの笑顔に戻っていて、さっきの話が嘘うそみたいだ。私はひとり置いていかれたような気分だった。

舞台は間もなく開演した。第二次世界大戦中の沖繩を題材にしたミュージカルだった。主演の女優が素晴らしかった。裏も表も金ぴかにコーティングされているような声。どこまでも届くような、ずっと伸びていくような声。

ああ、こういう人がやっぱり主役なんだな、と思う。私はまったくの素人だけど、この主役の人の声と顔と、それから立ち姿の存在感には納得させられる。

後ろで踊っている中に千夏がいる。相変わらず切りっぱなしの黒髪が跳ね、小柄な身体が弾む。うん、がんばっている。千夏、よくがんばっている。

ほほえましく見守っていられたのは、しかし序盤のうちだけだ。千夏は端役ではあったけれど、ときどき独唱するシーンがあった。だんだん、千夏が登場するだけで呼吸の波が変わるようになった。心臓は早鐘を打っているのに、呼吸は深くなっていく。千夏の動きをよく見よう、千夏の歌をよく聴こう。

そんな思いに身体が勝手に反応しているらしい。

私だけではない。右隣にすわるひかりがずっと息を詰めているのがわかる。会場全体が千夏の一挙手(3)一投足を息を呑んで見つめているようにも感じられた。

クライマックスの前に、千夏は死んだ。歌っている途中で銃弾に倒れる役だった。役だと理解できたのは後になってからだ。えっ、と思った瞬間、まだ驚いていることも自覚できないうちに全身にざーつと鳥肌が立っていった。身体の芯が震えた。死ぬな、と叫びたかった。

死ぬな。生きる、千夏。もう一度生きて、歌うんだ。

圧巻だった。千夏は、すごい。千夏の歌は、すごい。何がどうすごいのか、自分でもわからない。歌もお芝居も善し悪しなどわからない私にさえ、千夏が特別に輝く役者であることははっきりわかった。

どうして、あの子が、いつのまに。——よかった、という思いと、地鳴りのように繰り返し響いてくる波。すごい、すごい、すごい。千夏への称賛とはまた別の何か、千夏の声と身体を通して現れた何かに對して、ただただすごいと思った。

幕が下りても、しばらく動けなかった。ひかりの顔を見ることができない。何もいわなくても、隣にいるだけでじんじん波動が伝わってきた。客席の人

の波がようやく引いてきたところで席を立ち、普段は顔を出す楽屋へも寄らず、ひとことも口をきかずに劇場の外へ出た。外はまだ明るかった。

ひかりも私を見ない。きっと同じ気持ちでいる。もしも口を開いたとしても、千夏はすごかったといあうことしかできなかつただらう。

駅までの道をふたりで黙って歩いた。さつき待ちあわせをした店はまだにぎわっていたけれど、前を通ってももう別の店みたいに見えた。<sup>(ウ)</sup>さつきまでの私とは違う私。ここで愚痴をこぼした私たちとはもう別の私たち。

駅で別れるとき、一瞬、ひかりと目が合った。ひかりの目はまだ真っ赤だった。

「スライダーズ・ミックスっていう曲があつたね」

思わず口走っていた。

「スライダーって球、わかるよね？ 突然上下左右に大きくカーブする決め球だよ。でもね、それ一球じゃだめなの。ストライクに入らないことも多いから。必ず他の球に交ぜて使うの」

何をいいたいのか、自分でもわからなかった。いながら発見する感じだった。

「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持ってんだ」



それを、千夏が教えてくれた。

「それでね、その球を合わせるの。そうしたらすぐくい試合ができる。ストレートやカーブやシュートや、いろんな球に交せてスライダーを投げて乗り切るの。千夏のスライダーはすごかったね」  
ひかりがうなずいている。

「ひかりのスライダーもきつとすごいよ」

「早希のもね」

やっと、ひかりが笑ってくれた。<sup>(エ)</sup>スライダーを磨こう。そう口にはできなかつたけれど、口にするよりもっと強く胸に刻む。いつか私の、私たちのスライダーズ・ミックスのために。

（宮下奈都『終わらない歌』による）

問  
(一)

傍線の箇所(1)(2)(3)の語の意味を簡潔に説明せよ。

問  
(二)

傍線の箇所(ア)「なんだかもやもやする気持ちちは、  
どうしても残るんだ」とあるが、「もやもやする気  
持ち」が「残る」のはなぜか。「ひかり」の発言に  
即して四十字以内で説明せよ。

問  
(三)

傍線の箇所(イ)「無神経な手で首筋を撫でられるよ  
うな心地がした」とあるが、何に対してそう感じて  
いるのか。本文の内容に即して四十字以内で説明せ  
よ。

問  
(四)

傍線の箇所(ウ)「さっきまでの私とは違う私」とあるが、「私」を(ウ)変えた直接のきっかけは何か。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。本文

問  
(五)

傍線の箇所(エ)「スライダーを磨こう」とあるが、そこにはどのような気持ちが入められているのか。本文全体の趣旨を踏まえて七十字以内で説明せよ。